

## 台湾濁水溪扇端部の〈二林〉地域にみる植民地産業化の影響 その2 日本植民地後期における二林市街の変容

台湾濁水溪流域	日本植民地	市場
二林(彰化縣)	町屋(店屋)	三合院

正会員	青井 哲人*	正会員	寺内 達也**	正会員	陳 穎碩***
同	○河野 紗輝**	同	保川 あづみ**	同	辻原 万規彦****
同	今 進太郎**	同	相川 敬介**	同	恩田 重直*****
同	杉本 まり絵**	同	武田 峻哉**		

### 1 はじめに

前稿では二林地帯の農村部における糖業開発の影響をみるため、三五公司による小作制農場経営と客家系農業移民について報告した。本稿では、濁水溪流域扇端部の二林溪および舊二林溪に接する二林街の、日本植民地後期の変容について述べる。二林街は周辺農村の集散市場としての特質を基本として、鹿港—三林港—北斗の水運に派生する小規模な港の性質を併せもった街であったとみられる。

### 2 二林地帯の歴史の変遷

#### 2-1 清朝時代(17~19世紀)

日本植民地期の市街変容について報告する前に、まず二林地帯への漢人入植と地域開発から述べたい。

二林地帯の平埔族(平地原住民)は、彼らのもつ栽培技術や狩猟の特質からしばしば移動した。漢人が入植したのは17世紀末のことであり、その頃の平埔族は現在の東和里、西平里、南光里、北平里に集住していたようである。

漢人は入植とともに周囲への開墾活動を進めていく。18世紀中頃にはその影響から周囲の環境が変化し、平埔族の移動できる範囲に限られ、定住化した。今日でも平埔族集落を示す地名が残る。

前稿でも述べたように、二林地帯は排水が悪く、農業基盤に恵まれていたわけではないが、それでも早期に二林街という周辺農村の物資集散拠点を持つに至っていた。またかつては二林港と呼ばれる舊二林溪の港を擁し、河川を通じて鹿港の外港である三林港(現芳苑村)から

胡麻や穀物などさまざまな物資が運ばれていたという。

#### 2-2 植民地期(1895-1945)

図1は日本植民地期中期(1921年)の地形図である。高密度な市街は主廟である仁和宮を中心とするごく小さな範囲にとどまり、廟正面を東西に走る街路に向かい合う町屋市街が都市軸をなしていたことが見て取れる。廟前には舊二林溪まで達する広場(廟埕)があり、これが市場であったことは、小規模ながら河港都市の姿を伝える。旧市街地の東に学校や郵便局といった植民地期の公共施設が確認できる。また、市街を北側から取り巻くように農村集落が広がっていた。

現在の地籍図(図2)をみると、廟の周辺は間口が狭く、奥行の長い短冊状の地割が集中し、その西や北には正方形に近い、より大きな地割が先行していたことが読み取れるので、これが上述のかつての景観をよく伝える。ただし道路が基盤目状に通されて矩形の街区をなし、公設市場が廟の北に見える。

これらから、清末から日本植民地初期の市街地は図2の赤い網掛けの部分であったと推測できる。これは『二林鎮志』にある、「日治初期的二林街、仍舊夾擠在今斗苑路之南、與舊二林溪の南北兩岸、相當於今天西平里東側與東和里西側、而仁和宮即位在市街聚落的正北方」という旧市街地の範囲とも一致する。

旧市場には何らかの建物があったようだが、1925年に焼失し現在地に移転された。1920年代に市街地の拡張が進み、官庁・学校・銀行などの施設は東西都市軸の東へと立地していった。



図1 1921年日治二萬五千分之一地形圖

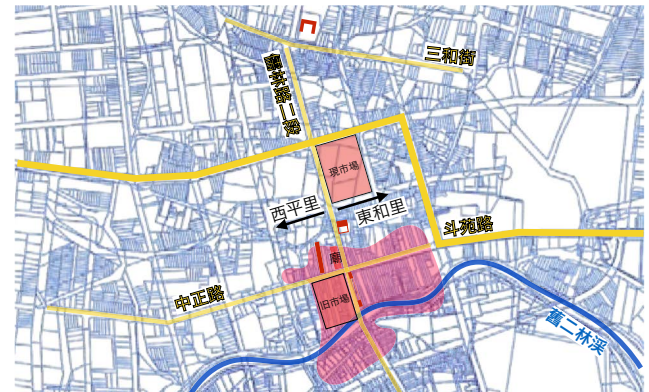


図2 日本植民地期以前の市街地 地籍図より筆者作成

**Impact of the Japanese Colonial Industrialization on Jilim(Erlin) situated in the Distal Swamp Area of the Lôchúikhoé(Zuosuishi) Fan , Part 2 Transformation of the Market Town of Jilim(Erlin) in the Late Japanese Colonial Period**

*Akihito AOI	**Tatstuya TERAUCHI	***CHEN Yin-Chen
**Saki KONO	**Azumi YASUKAWA	****Makihiko TSUJIHARA
**Shintaro KON	**Keisuke AIKAWA	*****Shigenao ONDA
**Marie SUGIMOTO	**Shunya TAKEDA	

### 3 二林の建築物

ここでは市街が拡大され始めた1920年代以降に建設、建て替えられた建物を中心に紹介する(図2参照)。

#### 3-1 市街拡大期の町屋1(儒林路二段432,434)

廟の北に位置するこの建物は、市街拡大に伴い1925～1930年頃に建てられた、煉瓦造二階建ての五間連棟式街屋である(図3はそのうち2間を示す)。土地は一筆であり、実質的な所有関係は口約束による。間口4,000～4,500mm、煉瓦造部分の奥行約12,000mm、増築部分も含めると奥行約30,000mmとなっている。

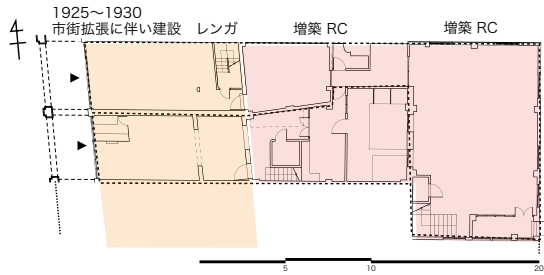


図3 儒林路二段432,434 一階平面図

#### 3-2 市街拡大期の町屋2(儒林路二段370,398,400)

旧市場の東側に並ぶ建物群は1925～1930年頃に建設された煉瓦造二階建ての連棟式街屋の集合体である(図4はその両端を示す)。南北に長い土地がいまも一筆である。間口4,000～4,500mm、奥行約10,000mmである。

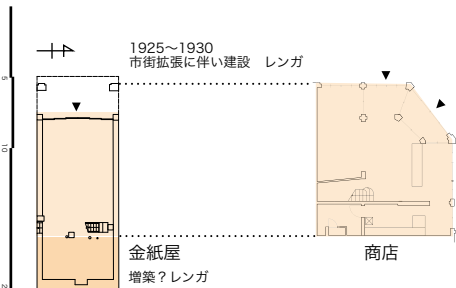


図4 儒林路二段370および398,400 一階平面図

#### 3-3 市街拡大前の建物(中正路66)

廟前面の東西街路に面するこの宅地は1863年建設で、間口約3,500mm、奥行約43,000mmであるが、1928年にRC造で建て替えられた店舗棟の奥に、1863年建築の木造穿斗式の伝統的な平屋建物が残る。両者のあいだに深井(中庭)があり、木造建物にある正庁(神明庁)はこの庭に向かって開く。

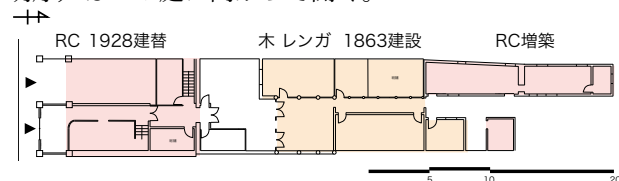


図5 中正路66 一階平面図

#### 3-4 旧農村集落の三合院(三和街136)

この三合院は、廟から北に約350mの位置にある。聞き取りによれば、かつて市街を囲んでいた農村集落は1960年頃にはほとんどその景観を失っていたようであり、この建物を含む2棟のみがその名残を示す。3-1で紹介した五間連棟式街屋を建設した洪家の大厝であり、1850～1860年ごろの前身建物を1931年に建て替えたものであることが聞き取りからわかった。正庁は木造穿斗式とするが他は煉瓦造である。

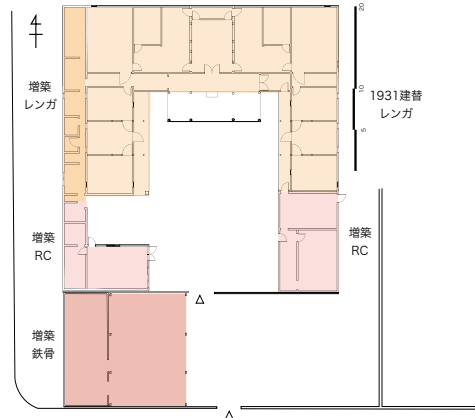


図6 三和街136 平面図

### 4 むすびに

二林街はかつて小港を擁する農村集落の集散拠点であった。舊二林溪に平行する東西街路を都市軸とし、その北に南面させた主廟を置き、ここから川岸に達する廟前広場を市場とする小市街であり、周囲を農村に取り巻かれていた。その改造と拡張は、糖業開発を主軸とする植民地産業化がその端緒を切る1920年代に進んだ。

町屋宅地についてみれば、市街拡大前(事例3-3)は間口約3,500mmであるのに対して、拡大後(事例3-1,2)は4,000～4,500mmと広がっている。また拡大前は平屋である程度の奥行があり、前面に店舗、後方に居住空間があったのに対し、拡大後は二階建てで奥行が狭く、一階に店舗、二階に居住空間とする。またかつて周囲には3-4のような三合院の屋敷地が低密に展開する景観が広がっていたが、市街拡大に伴って急速に開発されたようである。

### 参考文献

洪麗完 2000『二林鎮志』(彰化縣二林鎮公書)

\*本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」(代表：青井哲人、平成27年～31年度)の成果の一部である。

\* 明治大学理工学部建築学科 教授・博(工)  
 \*\* 同大学大学院理工学研究科 博士前期課程  
 \*\*\* 博(工)  
 \*\*\*\* 熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 教授・博(工)  
 \*\*\*\*\* 法政大学エコ地域デザイン研究所 研究員・博(工)

\*Professor, School of Science & Technology, Meiji University, Dr Eng. / \*\*Master's Course, Graduate School of Science & Technology, Meiji University / \*\*\*Dr Eng. / \*\*\*\*Professor, Faculty of Environmental & Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto, Dr Eng. / \*\*\*\*\* Researcher, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University, Dr Eng.